



図版8 オンライントーク事業配信中の職員



図版9 心の教育ふれあいコンサート連携の「ヨコビ探検隊」ツアーの様子(屋外彫刻の周りで)



図版10 「事前ガイダンス」や「展覧会 ココがみどころ！」はグランドギャラリー内で大型モニターを使い、二人一組で行った



図版11 ヨコハマトリエナーレ2017でのギャラリー・ツアー風景



図版12 ヨコハマトリエナーレ2017での「事前ガイダンス」や「ヨコトリ ココがみどころ！」風景



図版13 所蔵作品カードのボックス

# 横浜美術館の教育普及における所蔵作品と ボランティアの関わり —自主グループ活動の共同性から新たな価値創造へ—

端山 聡子

主に1980年代以降、日本の美術館においてボランティアは「市民が参画する美術館であること」の表れとして、また、来館者と美術館をつなぐ媒介役(メディエーター)として普及がみられた。美術館ボランティアとして担う活動には、所蔵品展・企画展などでの来館者向けのトーク、プログラムの企画や実施補助、資料整理、大がかりな現代アート作品の制作補助などが代表的なものであろう。横浜美術館でも1989年の開館以来、ボランティア活動は様々な事業に関連して学芸・教育の両セクションで行われてきた。

2012年、教育普及グループが新設され、従来からあった子どものアトリエ、市民のアトリエに加え、教育プロジェクト<sup>1</sup>が設置された。教育プロジェクトのボランティア活動として、最初に取り組んだのが視覚に障がいのある方の鑑賞サポートで、いわゆる社会包摂(ソーシャルインクルージョン)のプログラムであった。その後、社会包摂を含むさまざまな事業のサポートをはじめ、ボランティア自身が担う事業も増えた。たとえば所蔵作品に関連する企画展・コレクション展のトーク、近隣のみなとみらいホールで行われる「心の教育ふれあいコンサート」<sup>2</sup>の参加小学校を対象とした横浜美術館体験ツアー、「ヨコビ探検隊」(図版9)、ヨコハマトリエンナーレガイドサポーター(以下ガイドサポーター)<sup>3</sup>としてのトークなどである。また、「来館者案内」として、横浜美術館のグランドギャラリーで来館した方との交流やニーズに応じたサポートをする活動もあった。

ヨコハマトリエンナーレ2020から、2022年12月現在までは、新型コロナウイルスの感染対策のため、活動の場を主にオンラインに移行し、学習活動をベースとする成果還元として一般の方々を対象にしたトークを実施している。

教育プロジェクトのボランティア活動は、生涯学習社会におけるボランティアとして<sup>4</sup>、個人やグループでの学びを来館者やプログラム参加者に還元するという循環を生むように設計している。本稿においては、所蔵作品と関わる活動である「自主グループ活動」に焦点を当て、美術館の資源である所蔵作品を軸に展開しているそのボランティア活動の趣旨、内容、方法、成果を担当者として振り返る。

なお、教育プロジェクトボランティアの活動の全体を示す資料として、本稿の末尾に「教育プロジェクトボランティア沿革(抜粋)」を付す。

## 1 ボランティアの「自主グループ活動」とは何か

教育プロジェクトボランティアの立ち上げから3年後、2015年に始まった「自主グループ活動」とは、ボランティアメンバーと職員によるテーマをもったグループ活動である。ボランティアが所蔵作品や作家について

学び、あるいは自分たちで調査をし、その蓄積や学習成果を使ってプログラム化して美術館来館者やプログラム参加者に還元することを構想した。学習(インプット)とその成果の社会還元(アウトプット)としてのボランティアによるトークプログラムや事業サポートの活動が、自然なつながりをもつよう配慮した。

一方で自主グループ活動は、いわゆる美術館ボランティアにおける課題を乗り越えるためのひとつの方策でもあった。その課題を3点挙げる。

第一にボランティアは美術の専門知識が学芸員や美術館の文脈からのみの享受に偏りがちで、作品理解が研究者や学芸員の知識をそのまま受け止めるという縮小再生産になり易い(いわばミニ学芸員化)、第二に専門性のある美術館職員に連なるという階層意識から、ボランティアが活動コンテンツを通じて職員との対等な関係性や協働性を構築しにくい、第三は、第一と第二から美術館が組織したボランティアは受け身的で主体性が低いことが課題と言われることなどである。こうした課題を念頭に自主グループ活動を創設し、運営した。

### (1) 活動内容—資源としての所蔵作品に対するアプローチ—

ボランティアが美術館と来館者を媒介し、人々に還元できるコンテンツをつくるボランティア活動を行うためには、どのような内容で活動を組み立てればよいのだろうか。

ボランティア活動の資源(リソース)には、横浜美術館の所蔵作品と展覧会があり、それに加えて横浜美術館とその立地エリア(みなとみらい地区)の現在および歴史的特質もある。そして、ボランティア育成においては、研究者や学芸員と近似した美術観を持つような縮小再生産の方向性を目指さず、ボランティア自身が学ぶことでつくられる作品解釈や、美術に対する概念を構築するような発展性のある活動を検討した。そのためには美術館の所蔵作品や展覧会から学ぶことに加えて、ボランティア自身が学習の主体になるための核となるコンテンツが必要であった。そのような考えから設置したのが「ヨコハマ・アートマップ」「描かれた物語」「丹下健三勉強会」という自主グループ活動であった。

「ヨコハマ・アートマップ」は、横浜の風景が描かれた所蔵作品と、現在の横浜の街のフィールドワークにより、描かれた当時と現在の風景を比較するという活動である。「描かれた物語」は、作品に物語のどの場面が描かれているのかを検討するというテーマを設定した。「丹下健三勉強会」は、横浜美術館建築の設計者の丹下健三と横浜のみなとみらい地区、横浜の街づくりの変遷を見ていく。このように作品に関わるもう一つのテーマを設定し、作品内容と重ね合わせていくことで、ボランティア自身が能動的に調べる領域が格段に増え、視野が広がるのである。

### (2) 運営—主体的な活動をつくるための仕掛け—

自主グループ活動の運営は、ボランティア自身が持つ経験やスキルを活かし、自主性を発揮し、コンテンツを通じたコミュニケーションを活発化させ、相互に協力し、影響を与え合い、時には議論を経て進めていくグループワークを基本とした。活動の場が開放的・民主的であること、ボランティアが活動の主体となることなどに留意した。とはいえそのような運営は容易ではない。たとえば会社員の経験者が豊かであれば、ボランティア活動に対しても組織のピラミッド構造を模した考え方が強くなる。あるいは職員との関係性については、いわゆる教師—生徒のような学校的な上下関係になることもある。ボランティア同士、あるいは

職員と対等な関係性を作ることは簡単ではないが、職員がそうした場をつくる努力をし、行動で示すことで、徐々に場が醸成されていく。それはたとえば、ボランティアからの提案を実現に向けて多角的に討議することや、議論を尽くして決めた内容を行うことなどを通して示される。

自主グループ活動の運営に際し念頭にあったのは、自然史系博物館での学芸員と参加者による共同的な調査・研究の展開や、公民館での住民の学び、職員との関係性、戦後の社会教育の理論<sup>5</sup>、1960年代のアメリカで始まったワークショップの手法<sup>6</sup>などであった。具体的には、平塚市博物館で浜口哲一が実践した教育プログラムを通しての調査から展示までの展開や、神奈川県下の博物館の連携による市民参加型調査からつくられた『神奈川県植物誌』<sup>7</sup>の成果、そしてこれらの活動の背景にあった伊藤寿朗の「第三世代の博物館」や「地域博物館」の概念などである。加えて寺中作雄らが構想した公民館の意義や目的、宮原誠一の世界教育論、片野親義、手塚英男ほか多数の優れた社会教育主事の仕事にみられる民主主義に貫かれた社会教育の実践例、1970年前後のアメリカの造園家、環境デザイナーのローレンス・ハルプリン、妻でダンサーのアンナ・ハルプリンによるワークショップの理論と実践も特筆すべき先行例である。特にハルプリンらは1980年代の日本の美術館において新しい教育普及として始まった「ワークショップ」と呼ばれる参加型、体験型の活動のルーツのひとつでもあった。

## 2 ボランティアの学習を支える仕組み

自主グループ活動のみならずボランティア活動全体においても横浜美術館の所蔵作品や展覧会などを活動の土台としていたため、ボランティア活動全体で学習を蓄積し、それを資源として活用するために下記のような仕組みや方法を用いている。

- ①ボランティア活動に資する「研修会・勉強会」の実施(来館／オンライン)
- ②作品や作家を調べるための「美術情報センター」との連携
- ③文献資料を収集し共同で使う「文献のキャビネット」
- ④所蔵作品を知るための「作品カード」
- ⑤定期メールによる連絡
- ⑥「ボランティア開室日」(来館／オンライン)の導入
- ⑦交流・相談・会議のためのオンライン会議システム(Zoom)の導入(2020年6月～)
- ⑧オンラインで活動するための「共有サーバー」Google Workspaceの導入(2021年10月～)

筆者が横浜美術館に着任したのは2013年9月で、膨大な所蔵作品をどのように把握し、理解していけばよいか思案した。文献のキャビネット、作品カードなどのツールは、ボランティアのみならず職員にとっても所蔵作品の基本的な知識や理解が不足している場合に有益であった。

### (1) 研修会・勉強会の実施(①)

これまで、月に1回のペースで、研修会や勉強会を実施している。研修会は活動に不可欠な内容のため参加必須であり、勉強会は任意参加とした。それらの内容は横浜美術館のミッションや沿革、所蔵作品について、

教育プロジェクトボランティアの活動の趣旨や、文献調査の方法についてなどであった。活動に必要なスキルとして、版画や彫刻の技法を知る体験、人の話を聞く姿勢を醸成する傾聴や作品の見方を深める対話による鑑賞のワークショップ、自主グループ活動のテーマに関連した研究者の講義などもあった。そのほか、所蔵作品や作家、丹下健三設計の建築の見学会、オンライン講座、ビデオ配信による勉強会など様々な内容と方法で研修会、勉強会を実施している。2021年秋以降の研修会・勉強会のうち所蔵作品に関連し、かつ外部講師によるものは、一般の方を対象にしたオンラインレクチャー<sup>8</sup>として実施し、そこにボランティアも参加するという方法で実施している。

## (2)美術情報センターの利用と文献のキャビネットの共有(②③)

横浜美術館の美術情報センターの資料を用いて、2014年前後からボランティアと職員が所蔵作品に関する文献を集めた。その数年後、ボランティア開室日には横浜美術館8階のフロアで、美術情報センターの所蔵図書が閲覧できる仕組みがつくられ便利になった。作家・作品ごとに文献資料を整理し、紙ホルダーに入れ、スチールキャビネットに共有した。頻繁に調べる作家や作品は、年々文献資料が増え、ファイルが厚くなっていった。2022年12月現在、4段キャビネットは6個になった。



挿図1 作家・作品の文献を格納しているキャビネット



挿図2 作家別ファイルと作品別ファイルがある

教育プロジェクト事業の大部分がコレクション展や所蔵作品と関連するので、この文献のキャビネットは、自主グループ活動以外の教育プロジェクト職員による「コレクション展ギャラリートーク」、中学校の美術科教員と授業案をつくる「中学校・美術館合同研究会」、「コレクションと学校をつなぐ鑑賞会」、「社会的自立に困難をかかえた若者の支援プログラム」などの教育プロジェクトが実施する教育プログラム、横浜トリエンナーレのガイドサポーターの育成などでも活用した。

## (3)所蔵作品カードの作成と活用(④)

1989年から『横浜美術館収蔵品目録』が発行されている。基本的な作品データに白黒の小さい作品図版が添

えられた、A4サイズ1ページに9点が掲載される冊子である。2015年2月に、これまで出版された目録の各ページを拡大コピーして切り取り、A5サイズの厚紙に貼り、所蔵作品のカードを作成し、作家別に収納する作業をした(図版13)。学習ツールをつくる目的でボランティアが製作し、延べ3週間でおよそ12,000点(当時)のカードが完成した。作家別に所蔵作品を調べる場合や、テーマ別に作品を選び出す際に活用した。

#### (4) ボランティア開室日とオンライン会議システムの導入(⑥⑦)

横浜美術館の8階のフロアがボランティア活動の場所となったのは、2015年3月からだった。共有フロアだったので、「ボランティア開室日」(以下開室日)として月に4~7日を設定し利用希望者が来館した。開室日はボランティア同士の会議、職員への質問や活動内容の相談、トーク原稿についての相談や校正、調べ物などの個人学習、文献の収集や文献資料の閲覧などの機会として利用された。

横浜美術館が休館中の2021年10月からは、新型コロナウイルスの感染対策としてオンラインによる自主グループ活動および開室日となった。2022年夏からは感染防止対策を徹底した上で、オンラインによる開室日に加え、横浜美術館仮事務所PLOT 48へ来館する開室日を開始した。

オンラインの会議システム(Zoom)の導入は、ヨコハマトリエンナーレ2020のガイドサポーター育成時からである。2020年3月の研修会をオンラインの動画(YouTube)配信に切り替えて以降、7月に再開されたガイドサポーターおよそ70名の育成事業はすべてZoomを利用し、ガイドサポーターが担うトークもオンラインで実施した。

#### (5) 定期メール、共有サーバーの利用(⑤⑧)

ボランティア活動に関する連絡は、発足当初から定期的に一斉メールで、毎月2回程度、活動内容やスケジュールなどを伝達する方法をとってきた。ボランティアが担う一般向けトークの準備段階では、職員とメールによる原稿の提出や校正のやりとりなども頻繁に行われた。

ヨコハマトリエンナーレ2020でガイドサポーターのオンライントーク実施にあたり、メールを使い添付ファイルでやりとりすることに限界を感じた教育プロジェクト職員から共有サーバー導入の提案があり、Google Workspaceの機能のうち共有サーバー(GoogleドライブおよびGoogleサイト)を取り入れた。このシステムを2021年10月から導入し、各自主グループ活動の資料やトーク原稿、会議録、スケジュールの共有に用いている。対面が叶わないコロナ禍の状況で大いに役立った。

### 3 自主グループ活動「ヨコハマ・アートマップ」「描かれた物語」「丹下健三勉強会」

自主グループ活動は、設置順に「ヨコハマ・アートマップ」(2015年～)、「描かれた物語」(2016年～)、「丹下健三勉強会」(2018年～)の3種類である。2019年までは教育プロジェクト全ボランティアのうち、希望者が参加する自主グループ活動であったが、休館中は横浜美術館仮事務所PLOT 48に活動場所が移ったこと、休館中は教育プロジェクトの事業を縮小したことにも影響を受け、2021年10月からのボランティア活動は自主グループ活動のみとなった。したがって、ボランティアメンバー全員が3種類の自主グループ活動のひとつ以上に所属し活動している。ここでは、その内容について述べていく。

### (1) ヨコハマ・アートマップ—所蔵作品と横浜の風景を重ね合わせる—

所蔵作品から横浜の風景が描かれている絵画などを前述の作品カードを用いて選び出し、「描かれた横浜」の一覧表を作成した。その中から各メンバーが担当する作品を選び、フィールドワークで調査を行ない、グループ内で発表した。プロセスとしては、作品に描かれた内容を詳しく見て、描いた画家について文献を集めて調べ、描かれた実際の場所に足を運び、写真を撮り、描かれた風景と実際の風景を比較した。一覧表とは別に、Googleマップを用いてボランティアと職員で共有する資料も作成した。横浜を描いた作品と実際の風景が毎年調査され、現在は全132点となった。

2016年10月からの展示「コレクション展第2期」では、最初のセクション「描かれた横浜」<sup>9</sup>を、教育プロジェクトが企画・担当した。この展示関連のプログラム「美術で街歩き—描かれた横浜をたずねて」は所蔵作品に描かれた横浜の風景の魅力と、実際の街のみどころを重ね合わせて案内をするものであった。これがボランティアによる最初の街歩きで、下記の4コースを実施した<sup>10</sup>。

- ①みなとみらいコース(横浜美術館周辺)
- ②横浜海岸通りコース(山下公園周辺)
- ③横浜懐古ゆめロードコース(桜木町～馬車道)
- ④港の風景コース(山下公園周辺)



挿図3 美術作品との街歩きの事業では、写真パネルで作品を紹介した  
撮影：加藤健

ヨコハマ・アートマップの活動の派生として、また「描かれた横浜」と関連して『季刊誌 横濱』(特集 20世紀の画家が描く横浜)<sup>11</sup>でも当館の所蔵作品を中心に桜木町、関内、山下公園、山手、本牧といった横浜の街を代表する地を描いた絵画・写真が取り上げられ、筆者を含む教育プロジェクトの職員も執筆した。

2019年に開催した企画展「原三溪の美術 伝説の大コレクション」展の関連プログラムのひとつ「原三溪で横浜街歩き ゆかりの地と美術を訪ねて」では、原三溪市民研究会メンバーと教育プロジェクトボランティアが合同で街歩きプログラムを企画し実施した<sup>12</sup>。

ほかにも2018年と2019年にはJICA課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」で国立民族学博物館における長期の滞在研修のうち1日を引き受け、10人ほどの海外からの研修生(以下JICA海外研修生)が来館した<sup>13</sup>。

この時に、横浜美術館の教育普及というテーマでボランティア活動を中心に筆者がレクチャーし、ボランティアが英語で所蔵作品を使った街歩きを行った。ペリー来航からの横浜の近代史を作品と街歩きで伝える英語トークは企画からボランティアに関わってもらい、実施した。

横浜の臨海部(中区と西区の海沿い)は賑わいのある観光地であり、開港以降の横浜の中心であり続けた地域である。このエリアを歩き、描かれた当時の風景を探することで街の成り立ちや変遷を知ることになる。フィールドワークでは、作品に描かれた場所を訪れることでの発見もあった。たとえば中西利雄の《横浜風景》(制作年不詳)が挙げられる。ホテルのロビーに飾られたかつてのアメリカ領事館の写真を見る目的でボランティアメンバーとアメリカ領事館があった場所(現在のホテルモンテ横浜)を訪れた。写真を確認してホテルを出ると《横浜風景》に描かれている赤煉瓦の建物があることに気づいた。これはかつての英国七番館で、現在は戸田平和記念館として建物の一部が残されていた。他にも、國領経郎の《山手風景》(1937年)に描かれた洋館の残された一部をフィールドワークで探し出したこともある。ヨコハマ・アートマップばかりではなく「描かれた物語」の自主グループ活動においても、今村紫紅の《竹取翁》(1912年)で描かれた斧の実物(前田青邨旧蔵品)を探し、博物館の展示を見に行くなど、フィールドワークから作品の内容に関する新発見がいくつもあった。2022年からは当初作成した4コースをベースに、オンラインでの街歩きトークの3コースを一般対象で実施している。

## (2) 描かれた物語—物語を調べ、作品と重ねて読み解く—

「描かれた物語」は、古今東西の物語の中の場面が描かれた作品と背景の物語を重ね合わせて読み解くことをテーマに調査した。

物語は古より、人間の悲しみ、絶望、共感、教えなどを現代まで伝えている。慰めや励ましを得ることもあれば、頭の中に情景を思い描き、想像力を膨らませるというように、それぞれの人が何らかの物語との付き合いを経験している。2016年4月より開始した活動では、最初に作品カードを使って物語を描いた作品を選び出した。所蔵作品には、ギリシャ神話、旧約聖書、伊勢物語、源氏物語、竹取物語のほか、中国の故事や仏教の説話など様々な物語が描かれていた。所蔵作品から386点の作品が選び出され、「日本&中国」「中国」「西洋」などのカテゴリーでリスト化された。その中からメンバーが各々関心ある作品を選び、物語のどの場面を描いているのか、画題となった物語はどのようなストーリーなのかなど、作品と物語の両者を調べて内容をまとめ、毎月1回「描かれた物語」活動日に順次発表した。2018年には年間を通じて取り上げる物語をひとつに絞ることで、成果が共有しやすいのではないかとというメンバーからの提案があり、伊勢物語をテーマに調査と発表に取り組んだ。

2022年12月、一般の方を対象に実施した初めてのオンライントークでは、活動日に発表があった全82点をトークの素材として検討し、下記の2種類を作成した。

①「描かれた『竹取物語』—光る少女の伝説」は、日本で最も古い物語とされる竹取物語を画題とした作品についての話である。所蔵作品のうち、長谷川潔の銅版画による挿絵と今村紫紅、小林古径の日本画を取り上げた。

②「亡き人への想い—ギリシア神話と能の世界から」は、ギリシア神話にある豎琴の名手オルフェウスと妻の別れ、能の演目「松風」の汐汲の姉妹と在原行平との別れの話を通して「愛する人を失う」という共通性



がある物語を描いた作品を取り上げるようになった。

取り上げたのは近代の彫刻や絵画であるが、画題となる物語は日本の平安時代のものや、紀元前からあるものなど、長い伝承期間を経た古典文学であった。ひとつの物語(竹取物語)でトークをまとめ、それぞれの画家が描いた場面の違いを取り上げるのと、愛する人を失うことをテーマにトークをまとめるという切り口の違いもボランティアメンバーの話し合いの中で決まっていた。

### (3)丹下健三勉強会—横浜美術館の建築とみなとみらい地区の変遷を重ねる—

2016年8月から横浜美術館8階の開室日を利用して横浜美術館を設計した丹下健三の建築についてのボランティア有志の勉強会が開始され、その後丹下健三による横浜美術館の建築も所蔵作品のひとつではないかというメンバーからの提案を受け、2018年に3つ目の自主グループ活動として設置された。発足当初に調査するテーマについて話し合い、分担して、毎月の活動日に発表した。横浜美術館の建築にとどまらず、みなとみらい地区の沿革と横浜美術館、丹下健三や丹下に関係する建築家について、あるいは横浜美術館所蔵作品のうち、丹下と交流のあった美術家たちの作品についても調べた。

2021年3月からの大規模改修工事のための横浜美術館の休館前に、丹下建築を象徴するグランドギャラリーでのボランティアによるトークを計画していた。しかしながら2020年1月末からの新型コロナウイルスの感染拡大により、休館前には実現できなかった。2022年はこれまでの調査から「横浜美術館 建築のヒミツ vol.1 みどころ発見!編」<sup>14</sup>を作成し、横浜美術館公式Twitterで発信した。その後ボランティアメンバーは2023年に実施予定のオンライントークの準備を始めている。横浜美術館のリニューアルオープン後にグランドギャラリーを舞台にボランティアトークが実現されることを期待したい。

## 4 グループワークでつくるボランティアトーク—原稿を書く、まとめる、話す—

自主グループ活動から一般参加者を対象とするトークを作成するには、内部の学習活動から外部(他者)へ伝えるための飛躍とも言える考え方の転換が必要である。まず、参加者を想定し、それまでの調査・発表の内容を吟味してテーマを立案する。次にトークプログラムの開始から終了までの構成案(シナリオ)を出し、原稿を分担して書き、まとめる。そして画像を用いてパワーポイントを作成し、リハーサルを何度か繰り返し、本番を迎える。完成までの長いプロセスが合議で行われる。互いの考えや執筆した原稿を尊重しながらも必要な意見を言い、時には不足する技能や情報などを補い合い、実施に漕ぎ着ける。

教育プロジェクトのボランティアが担うトークは、自主グループ活動から生成するトークだけではなく、さまざまなものがある。しかしながら、学びや調査を資源にグループワークを通じて共同で原稿を作成し、そこに教育プロジェクト職員がファシリテーターとして加わり完成し、来館者・参加者に提供するという流れは、これまで述べてきた自主グループ活動からのトーク展開の基本的な考え方や枠組みと同様である。

### (1)休館前(2021年2月)までのボランティアトーク

2014年2月、企画展「生誕140年記念 下村観山展」で一般参加者を対象としたボランティアによるトーク「展

覧会「ココがみどころ！」をはじめて実施した<sup>15</sup>。同年8月からの横浜トリエンナーレ2014で、サポーターによるガイド活動の実施計画があったことから、下村観山展は、育成プロセスとトークの質を検討するためのトライアルであった。以下に教育プロジェクトのボランティアによるトークの種類を記す。

- ①企画展・コレクション展での「事前ガイダンス」「展覧会 ココがみどころ！」(図版10)
- ②横浜トリエンナーレ2014、2017、2020におけるガイドサポーターとしての「事前ガイダンス」「ヨコトリココがみどころ！」「ギャラリー・ツアー」「作品前トーク」「作品解説」「オンラインガイド ココがみどころ！」(配信型、交流型)ほか(図版11、12)
- ③横浜トリエンナーレ2017、2020や横浜美術館での英語ほかによるトーク
- ④心の教育ふれあいコンサート参加小学校を対象とした美術館体験ツアー「ヨコビ探検隊」
- ⑤企画展関連や、JICA海外研修生を対象に実施した、所蔵作品を使った街歩き



挿図4 教育プロジェクトが企画した「ペリー来航展」では、展示室内で「展覧会 ココがみどころ！」を実施 撮影：加藤健

ここからもわかるように、大きくわけて横浜美術館の休館前までの教育プロジェクトのボランティアによるトークは、自主グループ活動をベースにおこなう所蔵作品を使った街歩き、横浜トリエンナーレに関連する多様なもの、当館所蔵作品やコレクション展、所蔵作品が多数含まれる企画展に関連するもの、横浜美術館内外を巡る小学校高学年との少人数のツアー「ヨコビ探検隊」や英語によるトークなどである。

## (2) グループワークでトークをつくる—事前ガイダンス／展覧会 ココがみどころ！—

①と②にある「事前ガイダンス」「展覧会 ココがみどころ！」は、横浜美術館の展覧会や横浜トリエンナーレを来館者が観覧する前に催しの趣旨をわかりやすい言葉で伝え、コンテキストに沿った鑑賞の機会を提供するという目的で実施した。したがって企画展、コレクション展、横浜トリエンナーレそれぞれの開催趣旨と、展示概要や趣旨につながる作品を1点以上紹介するという構成が基本である。育成プロセスにおいては、トークカーとして活動するボランティアに必要な資質を醸成する機会としても捉えていた。そのためにはトークの目的、テーマはどうあればいいか、参加者はどのような人々かなどをグループで話し合うことから始めている。

そして、事業の開催趣旨を理解し、自分たちの言葉で整理し、まとめ直す。共同で原稿を作成する過程で、メンバー同士が考えを相互に理解しあうこと、言葉で伝えること、協調していくことの難しさと楽しさを体

験する。取り上げる作品は丁寧にみてディスクリプション(叙述)し、作品の解釈について議論し、併せて関連文献を読んで参考にする。学びのプロセスには「対話による鑑賞」の方法も取り入れた。学芸員や研究者が書いた言葉をそのまま使うことなく、あるいは作者の人生やメッセージに作品を安易に重ねてしまうような飛躍する解釈でもない。まずは来館者がみる<sup>16</sup>作品を同じ目線で、つまり自分たちの目の前の作品に対して時間をかけて詳細にみることで、ボランティア自身がわかること、気づくことを重視してトーク原稿が作成される。

トークの構成案(シナリオ)を合意した後、各パートの原稿をメンバーで分担し、上映する画像を選び、情報の示し方などを調整して、まとめていく。原稿と上映スライド(PPT)が概ね揃ったところでリハーサルをして、トーク全体の調和を検討し、細部にわたる改訂を行ない、完成となる。

職員は討議のファシリテーションを担い、時には目的に沿うような軌道修正や原稿の書き方、言葉の選び方、画像の作成方法の指導も含め、活動を支え、完成へと導く役割を果たす。トークの立案から完成・実施までがひとつのワークショップでもある。共同作業として行うことの難しさはあるが、原稿に多様なフィードバックがあり、行き詰まった時のアイデアも出て、完成時にはボランティア各自の学習成果を総合的にまとめ、発揮するトークとなる。

ヨコハマトリエンナーレ2014、2017、2020でガイドサポーターとして活動するには、観覧前に参加申し込みをした団体(一般/学校)に対して横浜トリエンナーレの沿革、その開催年のテーマや趣旨を伝え、代表的な作品を1~3点紹介する「事前ガイダンス」を担当することが必須であった<sup>17</sup>。なぜならば、このトークが担当できるということは、横浜トリエンナーレ全体を理解しているからである。グループワークを経て、テストトークというハードルを超えないと、事前ガイダンスを担うことはできなかったが、これもグループワークで原稿を作成した。実施においては二人で担当し、一人が話をして、もう一人がパソコンを操作し大型モニターで画像を上映した。横浜美術館の企画展で行う場合もトリエンナーレと同様、15分程度で展覧会の趣旨や特徴を説明し代表的な作品を紹介した。

2021年秋以降の自主グループ活動で作成した35分程度(交流を含み60分)の一般向けのトークは、新型コロナウイルスの感染拡大のためにオンラインでの準備や実施を余儀なくされた。ひとつのグループが8人程度でトークを準備したが、ボランティアメンバーからの発案でトーカーが順次交代して行うことになった。リレー方式のオンライントークという他に例をみない特徴となった(図版8)。



挿図5 自主グループ活動やオンライントークでは、ボランティアメンバー各自が自宅から接続し、ホストコンピューターは横浜美術館であった  
撮影：加藤健

## 5 教育プロジェクト職員にとっての自主グループ活動—学習支援と場の運営—

職員の役割はファシリテーターである。まず美術や作品理解にむけて必要な導入や学習支援をする。取り上げる作品・作家と美術史をふまえ、作品のディスクリプション(叙述)と解釈、そこからの意味生成の範囲を広く、深く検討しなくてはならない。学習(インプット)から成果の社会還元(アウトプット)としてのトークまで、長期にわたり変遷がある。自主グループ活動では取り上げる作品と、もうひとつの要素である街のフィールドワーク、物語、街づくりの歴史などが加わるので、職員の専門性を超える領域を扱うことになる。

運営においては「創造的な場を醸成」するようにファシリテートする。バックグラウンドも年齢も多様なメンバーの人生経験を活かし、それぞれの能力や割ける時間を見極めながら、参加し、発言してもらい合意形成をする共有の場を運営する。事業の目的や構成メンバーによっても、実施に至るプロセスは変わる。職員は、事前制御をできるだけせずに、予定調和ではない(結論ありきではない)会議を通して、民主的な場を醸成するのである。時には意見の対立や、異論も出るが、それもオープンエンドクエスチョンとしてグループで意見交換をして決めていく。

ローレンス・ハルプリンらの「RSVPサイクル」ないしは「RSPVサイクル」<sup>18</sup>によるワークショップの流れとして、螺旋状に伸展する学びや活動<sup>19</sup>を行うファシリテーションを目指す。ハルプリンらのいうところの「ワークショップ」とは、バックグラウンドが異なる人々が、自分たちの経験その他を資源として確認し、共同で場を運営し、目的に向けて行動計画を立て、実際にやってみることで「創造に向かう集団創造」(collective creativity)<sup>20</sup>を発揮するという考え方である。自主グループ活動の運営で援用した方法のひとつは、この意味での「ワークショップ」であった。

## 6 成果と課題—みることを通じた価値創造と伝達／ボランティア活動の課題—

これまでみてきたように、自主グループ活動では作品をめぐる共同的な学びや開かれた場での討議から、能動的に知ること、みることへの意識が生まれる。作品に関する読み解きは、グループ内での意見交換により妥当性が検討され、またフィールドワークなどの調査を伴うので事実を踏まえた実証性も検討される。画家や彫刻家の「つくる」という創造性が語られる一方で、美術や作品を「みる」こと、それを「読み解く」こと「意味生成をする」ことの創造性については、明確なリアリティがない人も多いだろう。自主グループ活動では、丁寧にみることから始まる「みる」ことの創造性の体験が最終的にトークという形でまとめられ、発揮される。わずか数点の作品についてでも、みること、学ぶこと、そこからの解釈は尽きないという経験が、文化資源としての美術作品への尊重につながっている。ボランティアメンバーが多様なアプローチで作品を解釈し、新たな意味を生成できることは、文化的な豊かさの証左であり、こうした活動が生まれるのは、美術館という生涯学習施設が文化を伝承し、公開するからなのである。総括すれば、自主グループ活動に参加するボランティアは、人生経験やスキルを活かし、共同で作品を調査し、読み解き、語ることによって、横浜美術館の所蔵作品の新たな価値を創造し、社会や人々へ伝える存在となったと総括できるだろう。

最後に自主グループ活動を含むボランティア活動の課題についてごく簡単に触れておきたい。

美術館も所蔵作品も公共財であり、美術館職員の在籍期間よりもはるかに長く存在し続ける。学芸員やエデュケーターは、その公共財を活用して現代社会に資する活動を創出する専門職員として美術館に配置されている。その一方で美術館ボランティアは、どこに位置するのだろうか。利用者の側においてももっとも深く美術館や作品を利用する人々なのか、美術館職員に連なりその末端に位置して活動する人々なのか。無償の活動であるがゆえにどこまで何をすればいいのか／しなくてもいいのか、位置付けや捉え方は美術館によっても職員の職位によっても様々に見解が分かれる。ボランティアをはじめとする市民の参画を曖昧にせず、美術館の活動の一部として積極的に意味を与え、位置付ける必要があると考える。

自主グループ活動は、本稿の最初にあげたとおりボランティア活動における3つの課題を乗り越えるためのひとつのアプローチでもあった。本稿で詳述したように開かれた場で活動を営むことはボランティアにとっても職員にとっても容易ではない。職員は、ボランティアそれぞれの多様な考えや意見に耳を傾け、その一方で美術館として、あるいは教育普及や実施するプログラムの方針を鑑みながら、具体的な方策を検討し、運営に反映させるべきものは取り上げていく。それぞれの考えや意見も時には対立し、矛盾を孕むこともある。また、何かを選択すれば、何かを選択しないことになる。教育普及として達成すべき目的と、営まれる活動との整合性についても、概念レベルにおいても実際的な方法レベルにおいても、考え、検討し続ける。つまり、開かれた場で合意形成し、論理的にも破綻せずに、柔軟に変容し継続していくためには終わりなき葛藤を伴うのである。

そして、この論考としての課題もあげるならば、ボランティア活動に限らず、教育普及の活動を論述するにあたり、筆者も含め、企画者や実施する側の論理だけでは成果の検証としては十分ではないということである。本稿に即して言えば、ボランティアとボランティアが担う活動に参加した方々を対象に調査をおこない、事業や活動を評価する必要があると考える。それは、プログラム参加後、体験後のアンケート等で採取する一義的な評価だけではなく、参加者それぞれの体験の質的な分析と実施事業の目的を併せて検討し、総合的に評価することが求められる。

(主任エデュケーター／主任学芸員)

- 1 1989年の開館当初より、造形を中心に活動する「子どものアトリエ」と「市民のアトリエ」があった。2012年に教育普及グループが新設され、教育普及グループ内に、上記ふたつのチームに加え、「教育プロジェクト」が設置された。
- 2 「心の教育ふれあいコンサート」とは、横浜市教育委員会による市内の全小学校高学年を対象としたクラシックコンサートの鑑賞会。実施日数10日前後で、横浜市内約350小学校の主に5年生が来場する。横浜美術館から徒歩7分程度の距離にあるみなとみらいホールで毎年開催している。
- 3 横浜トリエンナーレのサポーター活動は多岐にわたり、ヨコハマトリエンナーレ2014、2017、2020において、教育プロジェクトが育成を担当したガイドサポーターの活動があった。
- 4 2008年の社会教育法改正で学習成果の活用の実施と奨励が社会教育施設等での教育活動に求められるようになった。中央教育審議会の答申『新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して』(2008年2月)を受けて、神奈川県では第10期神奈川県生涯学習審議会が『図書館や公民館や博物館などの生涯学習拠点としての可能性について考える～「知の循環」による神奈川の生涯学習のあり方～』(2012年6月)を神奈川県知事に提出した。筆者はこの審議会の委員だった。

- 5 端山聡子「本研修のねらい—美術館と公民館での経験から—」『第26回学芸員研修会報告書 社会教育・生涯学習の歴史と実践—美術語の教育普及活動を考えるために—』全国美術館会議、2013年3月、pp.8-11。
- 6 ランドスケープ・アーキテクトのローレンス・ハルプリン、ダンサーのアンナ・ハルプリンの述べるワークショップの概念と方法。ローレンス・ハルプリン、ジム・バーンズ「集団的創造とRSVPサイクル」『集団による創造性の開発—テイキング・パート』杉尾伸太郎、杉尾邦江訳、牧野出版、1989年、pp.32-66。
- 7 神奈川県下の博物館が協働した市民参加型調査の結果として、1988年と2001年に発行された本。詳細は、端山聡子「第7章 資源の蓄積と公開」『博物館教育論』財団法人放送大学教育振興会、2014年、pp.123-125。
- 8 「横浜ベイエリアの歴史と文化を巡る」シリーズ講座(2022年度)①明治の横浜を歩く—残された着彩写真を題材に一、②大正の横浜を歩く—関東大震災の写真と絵画を中心に一、③横浜ゆかりの建築家たち—それは「象の鼻防波堤」からはじまった—「横浜美術館コレクションを深掘りする」シリーズ講座(2023年度)①写真家 奥村泰宏・常盤とよ子夫妻が写した戦後横浜の光と影、②③描かれた能楽—収蔵作品を中心に、④建築家 堀越英嗣が語る 横浜美術館の設計プロセスと師・丹下健三の仕事
- 9 横浜美術館コレクション展 2016年度第2期「描かれた横浜」  
<https://yokohama.art.museum/exhibition/archive/2016/20161001-473.html>(参照2022-12-05)  
 下記の4テーマで、58点の所蔵作品と描かれた場所をマッピングした地図パネルを展示した。  
 ①新しい街の建設—みなとみらい21地区②港の風景—海岸通り・山下公園③丘の上の風景—本牧・山手④暮れなずむ風景—石渡江逸のまなざし
- 10 「描かれた横浜」関連プログラム「ボランティアによる美術で街歩き」  
[https://yokohama.art.museum/static/file/exhibition/collection2016part2\\_event.pdf](https://yokohama.art.museum/static/file/exhibition/collection2016part2_event.pdf)(参照2022-12-05)
- 11 「特集20世紀の画家が描く横浜」『季刊誌 横濱』(No.54 2016年秋号)神奈川新聞社、2016年、pp.4-55、p.65。  
<http://www.kanagawa-np.com/yokohama/backnumber/issue54.html>(参照2022-12-05)
- 12 「原三溪で横浜街歩き ゆかりの地と美術を訪ねて」  
<https://yokohama.art.museum/exhibition/archive/2019/20190713-538.html>(参照2022-12-05)
- 13 国立民族学博物館Archives 博物館とコミュニティ開発  
<https://older.minpaku.ac.jp/research/sc/training/museology>(参照2022-12-05)  
<https://older.minpaku.ac.jp/research/sc/training/museology/museology18>(参照2022-12-05)
- 14 「横浜美術館 建築のヒミツ vol.1 みどころ発見！」編をまとめたもの  
<https://yokohama-art-museum.note.jp/n/n63e96b2fa2de>(参照2022-12-05)
- 15 「生誕140年記念 下村観山展」(会期：2013年12月07日～14年02月11日)当館所蔵の作品も多数展示されることもあり、この展覧会が最初の「展覧会 ココがみどころ！」として横浜美術館グランドギャラリー内で、大型モニターを用いて実施された。
- 16 「みる」の文字には見る、視る、観る、診る、覧る、看る、など様々にあり、それぞれの意味により使い分けがあるので平仮名で表記した。
- 17 ヨコハマトリエンナーレ2020「オンラインガイド ココがみどころ！」03(ニック・ケイヴ)  
<https://www.youtube.com/watch?v=WbLSGI3dZs4&t=1s>(参照2022-12-05)
- 18 木下は、RSVPサイクルのほかにRSPVサイクルがあり得ることを述べている。木下勇「ワークショップを考える重要なキーワード」『ワークショップ—住民主体のまちづくりへの方法論』、学芸出版社、2007年、pp.55-56、pp.188-193。
- 19 ローレンス・ハルプリン、ジム・バーンズ「集団的創造とRSVPサイクル」『集団による創造性の開発—テイキング・パート』杉尾伸太郎、杉尾邦江訳、牧野出版、1989年、pp.32-66
- 20 木下勇「ワークショップを考える重要なキーワード」『ワークショップ—住民主体のまちづくりへの方法論』学芸出版社、2007年、pp.55-71。

2012年に新設された教育プロジェクトが担当したボランティア活動を年度別の資料としてまとめた。横浜トリエンナーレでのガイドサポーターの育成方法は、自主グループ活動の育成方法と深く関連しているが、紙幅の都合で本文には記載しなかった。本資料のデータ作成では、石塚美和(教育プロジェクト)の協力に感謝し記す。

- 凡例
- 事業名、プログラム名の固有名詞は初出のみ「 」を付した。
  - 固有名詞の表記や実施回数は横浜美術館年報およびヨコハマトリエンナーレ2014、2017、2020の報告書を基準にしたが、末尾にあげた教育プロジェクト所蔵データを参考に統一を図った箇所もある。
  - ヨコハマトリエンナーレに関しては、実施内容と実績を別記した。

## ■ 2012(H24)年度

教育プロジェクトは主に「鑑賞」に関する教育普及を担うチームとして発足した。一人ひとりの美術館体験が鑑賞を通してより豊かで多様になるために、また、市民のための美術館としての文化的土壌の形成等を目指し、「鑑賞パートナー」の名称でボランティアが発足した。スタート当初は視覚に障がいのある方のアテンドと対話による鑑賞を行うため、研修会などを経て実践に着手した。「視覚に障がいのある人となない人がともに楽しむプログラム」や視覚に障がいのある人となない人双方の鑑賞が深まるきっかけとなるよう構想された「鑑賞サポートシート」を用いて、館内誘導や視覚障がいのある方との作品鑑賞を実施した。これは前年度より文化庁の助成を受けた事業の一部であり、2012年度はより多くの参加者を迎えるべく、「サポートシートでたのしむ横浜美術館コレクション」を開催した。また、子どものアトリエの「夏休み子どもフェスタ」を教育プロジェクトとの合同事業として、鑑賞パートナーは、市内中学校の美術科教員有志の方々(「アートティーチャーズ・サポーター」)とともに、来館した子どもたちの鑑賞サポートを行った。

採用期間：2012年11月11日～2013年3月10日／2013年1月13日～3月10日

登録者数：16名

(夏休み子どもフェスタ)鑑賞サポーター4名+アートティーチャーズ・サポーター14名

## 2012(H24)年度活動一覧

- |                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| • 研修会・反省会                        | 11回 |
| • 視覚に障がいのある人となない人がともに楽しむプログラム    | 3回  |
| • サポートシートでたのしむ横浜美術館コレクション        | 4回  |
| • 夏休み子どもフェスタでの鑑賞サポーターの活動         | 7回  |
| • 夏休み子どもフェスタでのアートティーチャーズ・サポーター活動 | 8回  |

---

## ■ 2013(H25)年度

鑑賞パートナーが視覚に障がいのある方への理解を深めるための研修を継続した。来館者にサポートシートの趣旨や使用方法を案内するほか、視覚に障がいのある方の館内誘導や鑑賞のサポート役としても活動し、その実践からシートの内容検討も行った。新しい試みでは、企画展の来場者への観覧前の事前ガイダンスとして、ボランティアが展覧会の趣旨と代表作品を紹介する「展覧会 ココがみどころ！」を始めた。ボランティア活動の基盤として、収蔵作品、障がいのある方について、および他館の事例などへの理解を深めるための研修会や勉強会を継続した。

夏休み子どもフェスタに関しては、このイベントのみに参加するボランティアがいたほか、市内の中学校美術科教員のボランティアであるアートティーチャーズ・サポーターも加わった。

採用期間：2013年6月1日～2015年3月31日／2013年10月1日～2015年3月31日

登録者数：26名+子どもフェスタ限定鑑賞ボランティア3名+アートティーチャーズ・サポーター10名

### 2013(H25)年度活動一覧

・研修会・勉強会・見学会	17回
・視覚に障がいのある人とない人がともに楽しむプログラム	5回
・展覧会 ココがみどころ！（「下村観山」展）	4回
・夏休み子どもフェスタでの鑑賞サポート	8回
・夏休み子どもフェスタでのアートティーチャーズ・サポーター活動	11回

---

## ■ 2014(H26)年度

鑑賞パートナーを「教育プロジェクトボランティア」と改称した。ヨコハマトリエンナーレ2014(以下ヨコトリ2014)のガイドサポーターの育成および実施期間において、「ヨコハマトリエンナーレガイドサポーター」(以下「ガイドサポーター」)と教育プロジェクトボランティアは合流して活動した。この期間のみ教育プロジェクトボランティアは、ガイドサポーターと呼称した。教育プロジェクト職員が全ガイドサポーターの育成を担当した。ヨコトリ2014では、団体(一般/学校)向けの「事前ガイダンス」、来場者と横浜美術館会場を巡る「ギャラリー・ツアー」、新港ピア会場では「作品解説」をおこなった。トーク準備のため、美術館8階のスペースを利用する「開室日」が設けられ、職員への相談や自主的な学習の場として活用された。

前年度に続き、横浜美術館の企画展において展覧会 ココがみどころ！が実施された。「特別支援学校のための鑑賞プログラム」が新しく始まった。研修会や勉強会を継続し、収蔵作品の学びの一環として全所蔵作品の作品カードを作成した。ヨコトリ2014で始まった開室日が教育プロジェクトボランティアの活動でも継続され、定着した。

採用期間：2014年4月13日～2015年3月31日

登録者数：54名(うち、ガイドサポーターとして51名が活動)



## 2014(H26)年度活動一覧

• 教育プロジェクトボランティアの研修会	2回
• 展覧会 ココがみどころ！(「魅惑のニッポン木版画」展)	26回
• 特別支援学校のための鑑賞プログラム	3回
• 所蔵作品カード作り	13回
• (教育プロジェクトボランティア向け)開室日(8F)	7回

### 横浜トリエンナーレガイドサポーターの育成

横浜トリエンナーレサポーターには多岐にわたる活動があり、そのうちのひとつとしてガイドサポーターの活動がある。これを「美術館チーム」と呼称し、教育プロジェクトがガイドサポーターの育成を、会場での運営は黄金町エリアマネージメントセンターが担当するという分担でおこなった。

採用期間：2014年4月5日～11月30日

登録者数：106名(うち、教育プロジェクトボランティア51名)

• ヨコトリ研修会・勉強会(展示見学会含む)	35回
• ヨコトリ開室日(8F)	33回

### ヨコハマトリエンナーレ2014での活動

#### • サポーターによる事前ガイダンス「ヨコトリ2014 ココがみどころ！」

ヨコトリ2014について学んだガイドサポーターが、団体(一般/学校)に対し、15分程度、ヨコトリ2014の趣旨、基本情報、作品の見どころを紹介するという事前ガイダンス「ヨコトリ2014 ココがみどころ！」を行った。全ガイドサポーターが6グループに分かれ、グループごとに一般向けの原稿を作成し、テストトーク(全2回実施)を経たガイドサポーターが二人一組で担った。一般向けの原稿完成後、小学生向けの原稿を執筆したグループもあった。事前ガイダンスは事前申込制で実施した。

実施回数/参加者数/ガイドサポーター人数：99回/3,380名/44名

#### • サポーターによるギャラリー・ツアー(会場：横浜美術館)

横浜美術館会場入り口で来場者を対象に参加者を募集し、展示会場を巡りながら複数の作品を解説するギャラリー・ツアーを45分程度で実施した。事前ガイダンスのテストトークを経たガイドサポーターのうち希望者が原稿を作成し、ギャラリー・ツアーを担った。途中から実施日を週2日から4日に増やし、1日あたりの実施回数も大幅に追加して実施した。

実施回数/参加者数/ガイドサポーター人数：74回/893名/35名

#### • サポーターによる作品解説(会場：新港ピア)

新港ピア会場の展示作品のうち4作品をガイド対象作品とし、全ガイドサポーターから希望者を募った。一人2作品の原稿を執筆し、リハーサルを経て1作品8分程度の作品解説を行った。参加者は作品の前でガイドサポーター自身が募った。作品解説は、事前ガイダンスを担当できなかったガイドサポーターにとってはガイドトークの機会でもあった。

実施回数/参加者数/ガイドサポーター人数：24回/440名/9名

## ■ 2015(H27)年度

ボランティアが担う企画展での展覧会 ココがみどころ！を引き続き実施。みなとみらいホールで開催される「心の教育ふれあいコンサート」(以下ふれあいコンサート)との連携プログラムを開始した<sup>1</sup>。ふれあいコンサートとは、市内の全小学校(5年生)がクラシックコンサートを聴くという教育委員会の事業。この事業参加校を対象に、美術館内外をボランティアと巡るツアーを「ヨコビ探検隊」という名称で実施した。ボランティア1名が5~7名の小学生(主に5年生)とチームになってコミュニケーションをとりながら巡る、という内容。また、生きづらさを抱えた若者を対象とした「若者支援プログラム」が前年度からスタートし、今年度からボランティアがプログラム当日に加わり事業をサポートした。他にも「中高生プログラム」、特別支援学校の鑑賞プログラムの事業をサポートした。

収蔵作品から横浜の風景が描かれた絵画を調べ、現地の風景の調査を併せておこなう自主グループ活動「ヨコハマ・アートマップ」がスタートした。ヨコトリの開催年でなくともサポーター活動を継続しようと横浜トリエンナーレサポーターとの合同ゼミ活動もあった。

採用期間：2015年3月8日～2016年3月30日

登録者数：40名

### 2015(H27)年度活動一覧

・研修会・勉強会・見学会	34回
・展覧会 ココがみどころ！(「石田尚志」展)	28回
・展覧会 ココがみどころ！(「中島清之」展)	24回
・ふれあいコンサート連携プログラム(ヨコビ探検隊)	5回
・中高生プログラムサポート(「蔡国強」展)	12回
・若者支援プログラムサポート	3回
・特別支援学校の創作・鑑賞ワークショップサポート	2回
・ヨコトリサポーターとの合同ゼミ活動	10回
・ヨコハマ・アートマップ	28回
・所蔵作品カード作り	1回
・開室日	34回

## ■ 2016(平成28)年度

ボランティアが担うプログラムには例年の展覧会 ココがみどころ！、ヨコビ探検隊に加え、本年度は初めて英語で横浜美術館を紹介するトークを実施した。さらに、ヨコハマ・アートマップのメンバーは実際に横浜の街を歩き、横浜の風景を描いた作品を紹介する「美術で街歩き—描かれた横浜を訪ねて」を初めて一般参加者に向けて行った。これはコレクション展第2期の一部「描かれた横浜」(教育プロジェクトが企画)に関連する事業である。

事業サポートでは中高生プログラム、若者支援プログラム、特別支援学校の鑑賞プログラムを担当した。

収蔵作品から古今東西の物語が描かれた作品を選び出し調査・発表をする「描かれた物語」がスタートし、自主グループ活動は2種類となった。開室日を利用しボランティア有志が「丹下健三勉強会」を始めた(2018年に自主グループ活動として設置)。

横浜トリエンナーレサポーターとの合同ゼミ活動が継続された。

採用期間：2016年3月11日～2018年3月31日

登録者数：65名

### 2016(平成28)年度活動一覧

・勉強会・研修会・見学会	28回
・展覧会 ココがみどころ！(「富士ゼロックス版画コレクション×横浜美術館」展)	24回
・英語で横浜美術館紹介	1回
・「美術で街歩きー描かれた横浜をたずねて」(アートマップ)	4回
・ふれあいコンサート連携プログラム(ヨコビ探検隊)	3回
・中高生プログラムサポート	11回
・若者支援プログラムサポート	2回
・特別支援学校プログラムサポート	2回
・横浜トリエンナーレサポーターとの合同活動	10回
・ヨコハマ・アートマップ	26回
・描かれた物語	11回
・開室日	49回

### ■ 2017(平成29)年度

ヨコハマトリエンナーレ2017では事前ガイダンス、ギャラリー・ツアー、「作品前トーク」(前回展の作品解説にあたる)ほか、多種多様なトークが行われた。トークの種類、実施回数が増え、ガイドサポーターによるトークの参加者合計数が1万人を超えた。

ヨコトリ以外では、中高生プログラムや若者支援プログラム、特別支援学校プログラムなどの事業サポートがあった。ヨコハマ・アートマップ、描かれた物語の自主グループ活動も継続した。

採用期間：2016年3月11日～2018年3月31日

\* 2017年3月12日～11月23日ガイドサポーターとして活動

登録者数：65名(うち、ガイドサポーターとして41名が活動)

### 2017(平成29)年度活動一覧

・研修会・勉強会・見学会	8回
--------------	----

• 中高生プログラムサポート	11回
• 若者支援プログラムサポート	2回
• 特別支援学校プログラムサポート	2回
• ヨコハマ・アートマップ	3回
• 描かれた物語	3回
• (ヨコトリ含む)開室日	83回

### 横浜トリエンナーレガイドサポーターの育成

研修会、勉強会をおこない、ガイドサポーターと教育プロジェクトボランティアが合流して、ガイド活動をおこなった。ガイドサポーターを7~8名程度の14チームに分け、チームごとに事前ガイダンスの原稿作成や、作家・作品の情報交換、交流を通して事前ガイダンスほかのさまざまなトークの活動の実施につなげた。

採用期間：2017年3月12日~11月23日

登録者数：107名(うち、教育プロジェクトボランティア42名)

研修会：14回

### ヨコハマトリエンナーレ2017での活動

#### • 事前ガイダンス(会場：横浜美術館)

団体(一般/学校)向けの事前ガイダンス(約15分間)は事前申込制で、来場した団体にヨコトリ2017の趣旨と作品を数点紹介した。ガイドサポーターが二人一組で実施した。その他、英語による事前ガイダンスや、来場者個人に声をかけ、数名集まったら実施するという「いきなり事前ガイダンス」を新たに実施した。トーク原稿作成にあたり、前回のヨコトリ2014の事前ガイダンス実績から、①小学校4年生以下、②小学校5年生~中学校3年生、③高校生以上の3種類を用意し、内容、言葉づかいや話し方を工夫した。トークリハーサルを経て、69名が事前ガイダンスを担った。

実施回数/参加者数：団体100回/4,410名(英語によるガイダンスも含む)、

個人71回/736名 合計5,146名

#### • ギャラリー・ツアー(会場：横浜美術館)

事前ガイダンスのトークリハーサル終えたガイドサポーターのうち、希望者46名がトーカーとアテンダが交代して実施する約30分間のギャラリー・ツアーをおこなった。1作品5分程度で、2~3作品の原稿を作成し、リハーサルを経て二人一組となり、4作品をツアーした。

実施回数/参加者数：187回/1,664名

#### • 作品前トーク(会場：横浜赤レンガ倉庫1号館/横浜市開港記念会館地下)

一般来場者を対象に、3名以上の参加者をトーカー自身が集めて実施する作品前トークをおこなった。赤レンガ倉庫会場では、各トーカー1作品7分程度の原稿、トーク時間は参加者との会話も含めて15分程度だった。参加者が2作品を続けて聞けるように実施時間を工夫した。

実施回数/参加者数：横浜赤レンガ倉庫1号館 174回/1,691名

・「ヨコトリ2017をチラ観しよ！」(会場：横浜美術館前庭とグランドギャラリー)

事前ガイダンスのトークリハーサル終えたガイドサポーターのうち希望者が、子どものアトリエの事業「親子のフリーゾーン」参加者を対象としたツアーを無料ゾーンで実施した。

実施回数/参加者数：77回/624名

・「ヨコトリを多言語でご案内」(会場：横浜美術館グランドギャラリー)

海外からの来場者に声をかけて、会話形式で実施した。ヨコハマトリエンナーレ2017の趣旨やグランドギャラリーの2作品についてなどを参加者の希望に応じて話した。原稿執筆、リハーサルを経て主に英語、中国語で実施。

実施回数/参加者数：30回/63名

---

■ 2018(平成30)年度

ボランティアが担ったものは、「イサム・ノグチと長谷川三郎」展での展覧会 ココがみどころ！、ヨコビ探検隊や英語による同展覧会紹介だった。加えてJICAが海外の博物館の専門家を招聘する「博物館とコミュニティ開発」コースの海外研修生を受け入れた際には、英語による美術で街歩きを、横浜の近代史を辿る内容で実施した。

事業サポートでは、中高生プログラム、若者支援プログラム、特別支援学校の鑑賞プログラムなどを担当した。

自主グループ活動に丹下健三勉強会が加わり、3種類となる。横浜美術館や収蔵作品についての勉強会・研修会も実施。所蔵作品カード整理と文献収集も続けられた。

採用期間：2018年5月13日～2019年3月31日

登録者数：54名

2018(平成30)年度活動一覧

・研修会・勉強会・見学会	26回
・展覧会 ココがみどころ！（「イサム・ノグチと長谷川三郎」展）	45回
・企画展紹介Talk in English Exhibition Highlights! (英語)	7回
・ふれあいコンサート連携プログラム(ヨコビ探検隊)	7回
・JICA海外研修生対象の、美術で街歩き(横浜の近代史) (英語)	1回
・中高生プログラムサポート	11回
・若者支援プログラムサポート	4回
・特別支援学校プログラムサポート	2回
・ヨコハマ・アートマップ	10回
・描かれた物語	10回

- 丹下健三勉強会 11回
- 開室日 44回

## ■ 2019(令和1)年度

教育プロジェクトが企画した「絵でたどるペリー来航」展で、展覧会 ココがみどころ！が実施され、展覧会の中心となる所蔵作品、伝ペーター・B.W.ハイネ《ベルリ提督横浜上陸の図》に焦点を当て、各ボランティアの視点を活かし二人一組で15種類のトークが行われた。「原三溪」展では原三溪市民研究会有志と連携し、作品を使った街歩きを行った。前年度同様JICAの海外研修生へ英語での街歩きも行った。

本年度は来館者に館内のご案内や障がいのある方をサポートする「来館者案内」があった。小学生、中高生、特別支援学校、生きづらさを抱える若者など特定の対象者へ向けた事業サポートのほか、3種類の自主グループ活動も続けられた。所蔵作品カードの整理や文献収集、開室日を通して、作品およびコレクションへの理解を深める活動も行われた。

採用期間：2019年4月20日～2020年3月31日

登録者数：経験者47名+新規34名 計81名

参加者数：のべ2,043名

## 2019(令和1)年度活動一覧

- 研修会・勉強会・見学会など 10回
- 展覧会 ココがみどころ！（「絵でたどるペリー来航」展） 40回
- JICA海外研修生対象の、美術で街歩き（横浜の近代史）（英語） 1回
- 来館者案内 52回
- ふれあいコンサート連携プログラム（ヨコビ探検隊） 7回
- 中高生プログラムサポート 10回
- 若者支援プログラムサポート 3回
- 特別支援学校プログラムサポート 2回
- ヨコハマ・アートマップ 9回
- 描かれた物語 9回
- 丹下健三勉強会 9回
- 開室日 38回

## ■ 2020(令和2)年度

コロナ禍で中止となった事業が多いが、ヨコハマトリエンナーレ2020のガイドサポーター活動を中心に、その他の活動もオンラインで行った。これまでのヨコトリ2014、2017と同様、準備・実施期間にはガイドサポーターと合流して活動した。実施したのは「オンラインガイド ココがみどころ！」の交流型および配信型の2種類で、交流型ではヨコハマトリエンナーレ2020の概要と作品の魅力を紹介するとともに、参加者同士

の交流の時間を設け、ガイドサポーターと参加者が交流した。大学の授業や、海外を含む遠方からの参加など、これまでにない参加者が多数含まれていた。オンラインガイド ココがみどころ！配信型は動画配信だった。

ヨコトリ2020後は、3つの自主グループ活動、勉強会、開室を利用したの文献収集や所蔵作品カードの整理などを続けた。

採用期間：2020年4月1日～2021年2月28日

\*4～10月はガイドサポーターとして活動

登録者数：81名

## 2020(令和2)年度活動一覧

・研修会・勉強会・見学会など	3回
・ヨコハマ・アートマップ	4回
・丹下健三勉強会	4回
・描かれた物語	3回
・開室日	12回

## 新型コロナウイルス感染症拡大防止の影響により中止となった事業

- ・来館者案内
- ・JICA海外研修生の研修会
- ・中高生プログラム
- ・若者支援プログラム
- ・特別支援学校プログラム

## 横浜トリエンナーレガイドサポーターの育成

2022年1月ガイドサポーターは129名の登録であった。コロナの感染拡大があり、2月のガイダンスはかろうじて実施したが、2月29日～3月15日に美術館は臨時休館となり、3月中旬からの研修会、勉強会がすべてYouTube配信となった。4月7日～5月25日の緊急事態宣言後もYouTube配信を継続した。6月はじめにヨコトリ2020の開幕が決定され、6月末に当初登録した全ガイドサポーターを対象に改めて継続の意向確認を取り、ガイドサポーター72名の育成を再開した。コロナ禍のため、研修のレクチャーで可能なものは録画しYouTube配信した。グループワークや、リハーサルはすべてオンライン会議ツールでおこなった。6～8名ずつ10グループに分かれて、ミーティングを重ねながら事前ガイダンスであるオンラインガイド ココがみどころ！の原稿を作成した。

ガイドサポーター登録人数：129名→72名(6月末)

採用期間：2020年2月半ば～11月半ば

研修動画配信：9回(ガイダンス2回含む)

トーク原稿作成のためのグループワーク(オンライン)：36回

会場下見(実地)：4回

トークリハーサル(オンライン)：18回

ヨコトリ開室(オンライン)：10回

### ヨコハマトリエンナーレ2020での活動

#### ・オンラインガイド ココがみどころ！交流型

ガイドサポーターが横浜美術館(8階)に来館し、二人一組でヨコハマトリエンナーレ2020の趣旨、概要、作品の見どころをオンライン会議ツールで紹介した。事前申込制で団体・個人を対象とし、英語や中国語も実施した。大学の博物館学などの授業での受講や、九州などの遠方や、海外からの接続などがあった。

ガイドサポーター登録人数：129名(実活動人数：57名うち教育プロジェクトボランティア：26名)

実施方法：オンライン

実施回数／参加者数／ガイドサポーター人数：92回／845名／57名

#### ・オンラインガイド ココがみどころ！配信型

ガイドサポーター一人での事前ガイダンス動画を撮影しYouTube配信した。

実施方法：オンライン配信

配信型のサポーター活動者数／種類：12名／12種類<sup>2</sup>

動画総再生数(8月23日～10月11日)：3,871回

## ■ 2021(令和3)年度

横浜美術館は休館中のため、仮事務所PLOT 48に移転した。休館にともなう事業の縮小により、ボランティア活動はヨコハマ・アートマップ、描かれた物語、丹下健三勉強会の3種類の自主グループ活動のみとした。新型コロナウイルスの感染にも配慮し、10月からの活動に際しGoogle Workspaceを導入し、クラウドサーバーによる情報共有や資料閲覧やオンライン会議ツール(ZOOM)でミーティングをおこなうなど、活動の全てをオンラインとした。ヨコハマ・アートマップは、2022年3月に、福岡市美術館、国立西洋美術館のボランティアに協力を呼びかけ、一般対象に次年度オンラインで実施する「横浜美術館コレクションと歩く ヨコハマ・アートウォーク」(3種類)のリハーサルをおこなった。丹下健三勉強会は、横浜美術館の建築の魅力について、館の公式Twitterで発信した。描かれた物語は作品を調べ、グループ内発表をおこなった。このようなグループでの学習に並行して、研修会や勉強会を開催した。研修会は一般の方々に対するオンラインレクチャーのテーマをボランティアの自主グループ活動のコンテンツと重ね、一般向けのオンラインレクチャーがボランティアの研修会としても成立するような企画をたてた。開室日もオンラインでおこない相談や個人学習を促した。作品カードの作成・整理、文献調査を行った。

採用期間：2021年10月～2023年2月(予定)

登録者数：47名



## 2021(令和3)年度活動一覧

• 研修会、勉強会	6回
• 横浜美術館コレクションと歩く ヨコハマ・アートウォーク(3種類) (アートマップ)	3回
• 「横浜美術館建築のヒミツvol. みどころ発見! 編」(Twitter) <sup>3</sup>	12回
• ヨコハマ・アートマップ	18回
• 描かれた物語	6回
• 丹下健三勉強会	6回
• 開室日	20回

## ■ 2022(令和4)年度

昨年に引き続き休館中のためリニューアルオープン後の活動を見据え、様々な学習とボランティアが担うオンライントークの準備と実施をオンライン中心で続けた。ヨコハマ・アートマップは一般を対象としたオンライントークを3種類、全9回実施した。描かれた物語は2つのチームに分かれて、初めてのオンライントークを作成した。4月から実施内容を検討し2種類のトークを完成、12月に一般を対象にオンラインで実施した。丹下健三勉強会は年度末までに館の公式Twitterで2回発信予定、また、2つのチームに分かれて翌年度実施のオンライントークの準備を開始した。いずれも3種類の自主グループ活動の学習成果を一般の方々にプログラムを通して還元するためである。本年度中には自主グループ活動から作られたオンラインによるトークプログラム(7種類)が全て揃う予定。

採用期間：2021年10月～2023年2月(予定)

登録者数：47名

## 2022(令和4)年度活動一覧(2022年12月現在)

• 研修会、勉強会	5回
• 横浜美術館コレクションと歩く ヨコハマ・アートウォーク(一般対象) (「横浜美術館から広がるみなとみらい」「横浜懐古 桜木町駅周辺今昔散歩」 「コレクションでめぐる横浜今昔～海岸通り編～」)	9回
• 横浜美術館コレクションでめぐる物語の世界(一般対象) (「描かれた『竹取物語』—光る少女の伝説」 「亡き人への想い—ギリシャ神話と能の世界を通して」)	2回
• ヨコハマ・アートマップ	11回
• 描かれた物語	12回
• 丹下健三勉強会	8回
• 開室日	31回

## 【参考文献】

- ・『横浜美術館年報』(2013-2020年度)
- ・『ヨコハマトリエンナーレ2014「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」記録集』
- ・『ヨコハマトリエンナーレ2017「星と星座とガラパゴス」記録集』
- ・『ヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」記録集』

以下は教育プロジェクト所蔵データ

- ・ヨコトリ2014活動まとめ
- ・ヨコトリ2017ガイド&インクルーシブ事業結果報告
- ・ヨコトリ2017トーク5種類比較表
- ・ヨコトリ2020ガイドサポーター活動まとめ資料

- 
- 1 ふれあいコンサート連携プログラムのヨコビ探検隊は、横浜トリエンナーレ開催年には実施していない。
  - 2 横浜トリエンナーレサポーターのページには配信した動画(12種類)がアーカイブされている。  
<https://www.youtube.com/watch?v=WbLSG13dZs4&t=1s>(参照2022-12-11)
  - 3 横浜美術館ウェブサイトに配信したものがnoteにまとめられ掲載された。  
<https://yokohama-art-museum.note.jp/n/n63e96b2fa2de> (参照2022-12-12)

---

---

# The Commitment of the Volunteers in the Education Project to the Collection at the Yokohama Museum of Art

Hayama Satoko

(Senior Educator/Senior Curator, Yokohama Museum of Art)

The museum's volunteer activities, first undertaken in the Education Project in 2012, have been implemented based on a combination of the following three elements: 1. basic study for all activities; 2. support for the programs that were implemented in the Education Project; and 3. volunteer talks designed for museum visitors. In this paper, I focus on volunteer group activities related to no. 1 and 3. Launched in 2015, the volunteer group activities, conducted by volunteers and the museum staff, involve the works contained in the Yokohama Museum of Art collection. At present, they consist of three types: Yokohama Art Map, Stories in Pictures, and Tange Kenzo Studies.

In Yokohama Art Map, works that depict Yokohama scenery are selected from the museum collection, and by engaging in fieldwork in the streets of the city, participants compare the pictures with present-day landscapes. Meanwhile, in Stories in Pictures, participants read the story that serves as the subject of a given work, and then try to figure out which scene from the story is depicted in the work. In Tange Kenzo Studies, participants research the museum building and its architect, Tange Kenzo, and examine the effect that they have had on town planning in Yokohama.

In addition to consulting literature related to artworks and architecture, these activities are distinguished by the use of another perspective (such as Yokohama scenery, stories, and town planning) in order to interpret the content depicted in artworks. These volunteer group activities aim to achieve learning by enabling participants to conduct their own research, repeat presentations within each group, and share their findings. The activities are conducted using a group-work style in which the participants engage in discussions until they reach an agreement. This is intended to emphasize the democratic and participatory nature of the process and making the volunteers the subject of the activities.

The participants then present a variety of talk programs in which they introduce the results of the group study to museum visitors. In these talks, the participants make the most of their life experiences and skills in researching, interpreting, and discussing artworks as part of a group, so as to imbue the artworks in the Yokohama Museum of Art collection with new value, and convey this to other people and society.

In this paper, as the leader of the programs, I consider the aim, content, methodology, and results of the museum's volunteer group activities up until this point. At the end of the paper, I have also included a history of the volunteers in the Education Project as reference material.